

博物館資料を用いたアウトリーチ・プログラムの新視点

著者	高橋 順一
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	56
ページ	247-260
発行年	2005-08-04
URL	http://doi.org/10.15021/00001649

博物館資料を用いたアウトリーチ・プログラムの新視点

高橋 順一

桜美林大学

はじめに ―本論の目的―

- 1 桜美林・草の根国際理解教育支援プロジェクトの活動
- 2 異文化発見キットの特徴
 - 2.1 国別（文化別）のキット
 - 2.2 通文化的キット
 - 2.3 テーマ別のキット
- 3 レディメイド・キットとカスタムメイド・キット
 - 3.1 レディメイド・キットの問題
 - 3.2 カスタムメイド・キット
 - 3.3 対面貸し出しの必要性
- 4 文化的コンテンツ重視型キットと体験重

視型キット

- 4.1 ミニ民族誌としてのキット
- 4.2 体験生成型キット
- 5 モノ（実物資料）の教育力を考える
 - 5.1 モノが作る学習のコンテキスト
 - 5.2 モノが持つ体験生成力を最大限にひきだすために
 - 5.3 異文化理解教育の教材として適したモノとは
 - 5.4 異文化コンピテンシーの育成を目標として
- 6 提案：国立民族学博物館が目指すべきアウトリーチ・プログラム

*キーワード：アウトリーチ，教材キット，国際理解教育，異文化コンピテンシー，体験学習

はじめに——本論の目的

筆者は、これまで東京都と神奈川県の間境に位置する桜美林大学をベースに国際理解教育のためのアウトリーチ教育活動を行ってきた。活動の重要な柱のひとつが、世界各地から集めた実物資料のキットの貸し出し事業であり、国立民族学博物館（以下、民博）がいま力を入れはじめているアウトリーチ教育と類似している。

アウトリーチ教育活動は、近年日本の大学や博物館、企業やNPOが積極的に取り組むようになってきたが、まだ歴史が浅く経験の積み重ねに乏しいせいか、確立されたとは言いがたく、特に教材キットの開発に関しては、試行錯誤がくり返されている状態といっていよう。

しかしその中でも桜美林大学は、国際理解教育の分野で最も多くのアウトリーチ教育活動の経験を持つ機関の一つであろう。私立大学と国立の博物館という違いはあるが、これまで桜美林大学が地域社会の国際理解教育支援のためのアウトリーチ・プログラムの開発と運営を通じて積み重ねてきた経験と、また獲得してきた知識と技術が、民博および他の博物館が行う類似のプログラムにとって有益な示唆となるかもしれないと考える。本稿では、桜美林の経験に基づきながら、民博のアウトリーチ・プログラムが今後

目指すべき方向を検討し、新しい事業形態を提案することを目的とする。

1 桜美林・国際理解教育支援プロジェクトの活動

桜美林大学では、1997年より自ら最も得意とする国際教育の分野で地域社会に貢献することを目標としてアウトリーチ教育プログラムの開発に着手した。そして3年間の準備の後、2000年度秋より「桜美林・草の根国際理解教育支援プロジェクト（略称草の根プロジェクト）」として本格的な活動を開始した。

このプロジェクトの基本的な目的は、大学が有している豊かな教育資源を小中学校教師を中心とする実践家に提供することを通じて、地域の国際理解教育活動の向上深化を支援するところにある。また同時に、大学としては、そのような教育活動に学生を参加させることを通じて、インターンシップにも類した体験学習の機会を供するというねらいも持っていた。また「草の根」という名を冠したのは、現場教師を中心とする国際理解教育の実践家のだれにでも、煩雑な事務手続きや権威的な管理機構の介在なしに、直接支援の手をさしのべることを方針としたからである。

桜美林大学が地域の学校に提供できる教育資源としては、第一に外国人留学生があげられる。東アジア諸国を中心に世界各地からの留学生が常に300名以上在籍しており、その数は年々増加している。彼らは、国際理解教育のためのすばらしい人間的資源となり得る。草の根プロジェクトでは、留学生を授業の一環としてのフィールドワークやボランティア活動の形で組織し、地域の学校への訪問授業を実施している。最近では、毎年約150～200名（2004年度は180名）の留学生がこの訪問授業に参加している。

もう一つの教育資源は、大学が収集した民族服や民族楽器、生活道具等、世界各地からの実物資料である。桜美林大学は博物館を有していないが、博物館学の教育を行っており、その実習用に多少の文化資料を収集保管している。これらの資料は、もともと教材用として収集されるものであるから、学内の授業での利用とともに、地域の学校に貸し出して利用することに何ら異論はなかった。さらにアウトリーチ教育活動が盛んになるにつれて、資料収集の中心目的が博物館学教育からアウトリーチ活動に移ってきた。

当初我々は、米国で既に開発され広く利用されるようになっていたいわゆる「スーツケース教材」をモデルとして「異文化発見キット」と名頭けられた国際理解教育のための教材キットの開発を試みた。キットは特定の学習主題の下に作られ、いくつかの実物資料とその民族誌的解説や関連情報を記した解説シート、および児童生徒の学習活動を提案するワークシート等から構成される。それらを一つに収める入れ物としては、今日の日本の子供たちにとって楽しみを運んでくれる物としてスーツケースよりもなじみのある宅配便の箱をイメージしたプラスチックボックスを使うことにした。

2 異文化発見キットの特徴

草の根プロジェクトは、発足以来これまでに多くの異文化発見キットを試作した。その多くは実際に貸し出されている。作られたキットは、そのテーマに応じて3つのタイプに大別することができる。

2.1 国別（文化別）のキット

ひとつは国別（あるいは文化別）キットであり、特定の国や社会の文化から多くの実物資料を集めて構成される。教師から実物資料の貸出しを求められる際、国や地域が指定されることはきわめて多い。そこには、教科書の単元で扱われていたり、クラスに外国出身の子供がいたり、あるいは外国人ゲストを招いての授業が計画されていたりと、理由は様々があるが、文化を国や社会と結びつけて見るということが社会一般に広まっている傾向である以上、それに応える形で国別キットを用意することは当然必要なことである。

国別キットには、様々な側面を代表する資料を集めていわば文化の全体像を捉えることができるようにした包括的なキット（その場合はコレクションと呼ぶ方が適切かもしれない）と、文化の中でも特に顕著な側面に集中して資料を集めた限定的キットの2種類が可能である。包括的なキットの場合、文化の多くの側面を適切にカバーするように集められたかなりの数の資料が必要となるため、少数の国だけに限られることになる。したがって、実際にはほとんどが限定的なキットの形をとることになる。しかし、大規模なイベント型の国際理解学習に利用するのでもない限り、限定的なキットでじゅうぶんに用は足りる。

2.2 通文化的キット

第二のタイプは、楽器や衣服等、互いに類似した機能を持つアイテムを複数の文化から集めて互いに比較対照できるようにした「通文化的キット」である。このタイプのキットの特徴は、コンパクトかつ明瞭な形で人類の文化的多様性に気付き、自分自身（の文化）を相対化することができる点にある。

その典型的な一例として草の根プロジェクトの「世界のラッパ」キットをあげることができる。このキットは、イギリスの狩猟用ホルン、中央アジアの軍用ラッパ、ネパールの寺院で使われる伸縮式の大形ラッパ、メキシコの山羊角ラッパ、ハワイのホラ貝、オーストラリアの木製ディージェリドゥー、それに日本の祭礼ラッパと現代のオーケストラ楽器としてのトランペット（ドイツ製）等から構成されている。素材および形態的には実に多様な姿をしているが、基本的にはみな同じ構造をしており、類似した機能（大きな音を利用して広い場所で遠くの人と通信する）をもっている。そしてこれらが

みなラップであることを示す何より重要な体験的に確認できる証拠は、どれも同じ吹き方で音が出るということである。このタイプのキットは、楽器をはじめ、水入れや枕などの生活用品、遊び道具等を使って実にたくさんの種類を作ることができる。

2.3 テーマ別のキット

第三のタイプは、特定の問題 (issue) を取り上げてグローバルな視野で学ぶという目的のもとに、互いに関連を持つ複数の資料を集めて作られるキットである。平和問題、環境問題、人口移動と交流の問題、民族アイデンティティーの問題等、このタイプの教材キットが最適となる国際理解教育のトピックは数多くある。ひとつ簡単な実例をあげよう。草の根プロジェクトでは、ラテン音楽の演奏によく使われるカリビアン・コンガとその歴史的原型であるアフリカの長胴太鼓を組み合わせたキットを用意している。両者の形態のおよび音響的 (演奏リズムも含めて) な類似は、過去の奴隷貿易によるアフリカ大陸とアメリカ大陸の結びつきを物語る明瞭な証拠となる。さらに加えて、今日の日本で一般的に販売されている普及型のコンガが、FRPやステンレススチールといった新しい素材を使って労賃の安い東南アジアの国で作られている事実に注目すると、人と物の地球規模の移動の歴史を、目のあたりにすることができるのである。

このように、異文化発見キットは、目的に応じて様々なタイプのものを作ることが可能であり、同じアイテムでも製作者と利用者の創造力次第でいくつものキットに利用することが可能なのである。

3 レディメイド・キットとカスタムメイド・キット

教材キットは、利用者ではなく貸し出しをする側の支援者が自らの教育理念と方針に基づいて、設計から製作までを手がけるのが通常である。

3.1 レディメイド・キットの問題

しかし、草の根プロジェクトにおける異文化発見キットの貸し出し利用の経験からわかった重要な事実のひとつは、教師が必ずしもキットに含まれているモノのすべてを利用するわけではないということである。これは必ずしも、借り出したキットの中に含まれている特定のアイテムが何でありどう利用したらよいかがよく分からないためではない。それはむしろ自らの授業計画の中には入っていないアイテムがキットの中に含まれていたためであると考えた方がよいようだ。

また時には、我々が想定していなかった利用法が見られることもしばしばある。ある時我々は小学5年生のクラスから「チェギ」と呼ばれる韓国の紙製のけり羽が欲しいとの要請を受けた。チェギは韓国の遊びキットの中に含まれていたそのキットを箱ご

と貸し出そうとしたが、借り主はチェギだけを希望していた。話をきいてみると、このクラスでは既に十分な調べ学習を行い、チェギの存在もその遊び方も知っており、さらにインターネット上で見た写真と解説を頼りに想像力を駆使して自分たちで試作してみるところまでやっていた。彼らが望んでいたのは、自分たちが作ったチェギが正しかったかどうか確かめることだったのである。担当教師の事後報告では、子供たちは本物のチェギを実際に目で見ることができ非常に感動していたという。

その反対に、せっかく貸し出したキットが全く使われずに終わってしまうということももちろんある。訪問授業で学校に出かけた学生から、数日前に貸し出されたキットがほぼこん包されたままの状態ですみに置かれているのを見たという報告を受けると、支援者としては実に残念な気持ちになる。

貸し出し用の教材キットは、提供者側の教育的意図に基づいて作られているのが普通である。つまり内容的に固定されたレディメイドのキットである。当初、我々もそのようなレディメイドの固定教材キットを作って貸し出そうと考えたのは、利用者のできるだけ正確な民族誌的知識を伝えるとともに、利用の簡便さを意図したためである。また、管理と移送の容易さというのも大きな理由であった。しかし実際にそのようなキットの製作を試みてみると、予想以上に多くの時間と労力を要する仕事であることに気がついた。博物館の解説札や図録に含まれる情報に近いような水準の情報を集めてそれを要領よく書きまとめるという仕事は、とても大学教員が片手間にできる仕事ではなく、ましてや学生に任せられる仕事でもない。さらにワークシートを作るという作業に関しては学校現場を熟知した教師の協力なしに行うことはきわめて困難であり、時に無意味でさえある。

実は我々は、実物資料の選択から解説シートに書かれる民族誌的情報、ワークシートで提案される学習活動のすべてにおいて、大学研究者の視点と小中学校の現場教師の視点のくい違いを痛感した。大変な労力を投下して製作するレディメイドの固定キットであるが、利用者にとっては必ずしもニーズに合致せず、使い勝手もあまりよくなかったのである。

3.2 カスタムメイド・キット

そのような問題を解決するため我々が加えた工夫は、貸し出しにあたって、個々の利用者の要望に応じてレディメイドのキットに他の資料をいくつか加えたり省いたりすることであった。そうすることにより我々が提供する異文化発見キットは、個々の利用者のニーズにより適合したカスタムメイドのキットとしての性格を有するようになる。さらには、利用者自身が全く自由に資料を選んで自分自身のユニークなキットを作って授業で使う、という利用形態まで発達した。現在、草の根プロジェクトで貸し出すキットの大半は、我々の助言を受け入れながら利用者自身の希望に応じて作るカスタムメイ

ド・キットである。レディメイドのキットをそのまま借りていくのは、授業での利用法がまだ十分明りょうになっていない利用者にほとんど限られると言ってよいだろう。

3.3 対面貸し出しの必要性

もちろんこのようなことが可能なのは、利用者が直接草の根プロジェクトのオフィスまでやってきて自分自身で借り出していくからである。近隣地域を対象とするアウトリーチ活動では、それが可能なのである。したがって、現在の異文化発見キットは、レディメイドのスーツケース型でも宅配ボックス型でもなく、自分が好きな物を選んで入れるスーパーマーケットのショッピングカートのような形態が基本となっている。2004年度には、そのようなキットを延べ39回貸し出している。

キットの借り出しや下見のために資料室にやってくる利用者と接して会話を交わすという経験を通して感じるのは、彼らにとって実際に教材資料を目で見て、手に取り、操作するとともに、他の資料と比較してみる時間は、実に創造的な時間であるということだ。多くの教師が、実物資料を目の前にして自分の授業での利用法を具体的に構想する。その際に我々が提供する情報は、例えそれがわずかのものであっても、彼らの創造力を大いに刺激し、新しい利用法をイメージさせることがある。利用者とのふれあいはまた、我々にとっても学校での利用法に関する洞察を得る重要な機会となり、新たな資料の収集計画を立てる上でも非常に役立つ。

このように、利用者と支援者が直接顔を合わせてともに話し合いながら協働して授業作りを進めることは非常に有意義なことである。相互理解と信頼があつてこそ、アウトリーチ教育活動は成長していけるということを、我々は、過去8年間の経験を通して実感している。草の根プロジェクトが原則としてキットの借り出しと返却を利用者自身の手で行うことを求めているのは、そのためでもある。

4 文化的コンテンツ重視型キットと体験重視型キット

国際理解教育の教材としての実物資料は、二つの側面を持っている。ひとつは、それが持っている文化的な意味の側面であり、もうひとつはその物理的な属性を通じて感覚的な体験を作り出すという側面である。それを知識的な側面と体験的な側面と呼ぶこともできる。モノを教材として利用するにあたっては、その両方に細心の注意を払わなければならない。

4.1 ミニ民族誌としてのキット

民族・民俗学的な資料を教材として利用する場合は、当然ながらその文化的な側面を重視することが多い。一つ一つの資料の当該文化での使用法やそれに結びついている

様々な意味が、重要な知識として学習者に伝えられ、さらにはその文化に対する理解と関心が深まることが期待されている。そこではモノは重要な知識を伝える媒介手段として利用される。したがって教材キットは、一つの文化の様々な側面を代表するモノの集まりとして構成される。例えば、韓国の民族服（チマ・チョゴリ）と、典型的な家庭用食器、それに楽器（チャンゴ太鼓など）や遊び道具（ユンノリなど）等、である。さらに寝具や児童の学習用具等が加えられれば、キットは衣食住から娯楽や教育までカバーする包括的なものになる。そのようにして作られるキットは、モノを介して伝える簡略的なミニ民族誌であるということができる。

このようなミニ民族誌型キットは、民博が開発した「みんぱっく」韓国キットをその最も優れた代表として、オーストラリア大使館が提供しているオーストラリア学習キットやNGOのピナツボ復興むさしのネットが貸し出しているフィリピンボックス等、いくつか作られており、実際に利用に供されている。しかし、人材にめぐまれている民博を除いて、ミニ民族誌型キットは構成資料が質的にも量的にも少なく、充実発展もあまり見られないようである。その理由は、民族誌的代表性という点で適切でありなおかつハンズオンの利用に適した資料を多く収集することが必ずしも容易ではないというところにあると考えられる。草の根プロジェクトでも当初はミニ民族誌型の教材キットを開発することだけを目指していたが、その苦労は大変なものだった。

4.2 体験生成型キット

モノが持つ力は、民族誌的な情報を伝えるということだけではない。モノが有する色や形状、大きさ、重さ等の物理的諸属性は、観察者に感覚・情動的な体験を作り出すという重要な作用を持っている。利用者に貸し出される教材は、学習者が直接手に持ち、視覚的に観察するとともに、手指で操作してその感触や重量や音色を体験するのが普通である。したがってモノの持つ体験生成的な力が、アウトリーチ教材にとって重要な意味を持つことになる。

そのことに注目すると、ミニ民族誌型キットの場合とは全く異なる形でのモノの教育的利用法が可能になる。この立場では、モノが作り出す体験に注目する。したがって、個々の実物資料が持つ民族誌的意味に加えて、あるいはそれとは独立に、物理的属性が重要な意味を持つ。

プロジェクトの経験が積み重ねられるにつれて、特に草の根プロジェクト自身が独自に教育活動を行う機会が増えるにつれて、体験生成型キットの有効性と重要性に対する認識が深まってきた。今日では、実物資料が持つ物理的な属性に対する注目なしにその文化的情報だけに基づいて教材化することはほとんど不可能に近いとさえ考えている。

5 モノ（実物資料）の教育力を考える

モノは、その文化的意味ゆえに教材として価値があると同時に、あるいはそれ以上に、体験を作り出すゆえに教材として有益である。モノが運ぶ文化的意味とモノが個人に作用して作り出す体験の相互作用の中で、学習は成立する（この考え方に関しては、フォークとディアークィング1996を参照）。

5.1 モノが作る学習のコンテキスト

モノの教育力を考える上で最も基本的な事実は、モノが物理的属性を持っている、ということである。あたりまえのことのようであるが、実はその意味は大きい。モノの持つ物理的属性は、学習者の身体と心理に直接働きかける。その結果、学習者の中に感覚的体験を作り出し、情動反応を生じさせ、行動的反応を引き出す。その総和が学習者個人にとっての基盤的体験である。

モノによって作り出された体験はまた、教室にひとつの「出来事」を生み（非日常性の出現）、この出来事が、知識学習の「コンテキスト」を用意することになる。すなわち、異文化に関する学習が、真空状態ではなく具体的な感覚情動体験を伴ったコンテキストの中で行われることになるのである。そのために学習者の学びは抽象的な概念だけのものではなく、具体的な体験を伴った学び——すなわち頭だけでなく身体中を使った学び、となる。

我々は、適度な興奮の高まりの中で出会ったものから強い印象を受け、そのものに好感を持ちやすい、という心理的傾向を持っている。具体的な感覚・情動体験は、それに結びつけられた知識の学習を助け、その長期的記憶と再生を容易にする。すなわち、モノが作り出す体験は、同時に起きる知識学習にとって促進的な効果を持つと期待されるのである。ここに、国際理解教育において実物資料を教材として使うことの意味がある。

モノが創り出す感覚体験は、その物理的属性や機能により多様である。例えば、大きな物と小さな物、重い物と軽い物、動かせる物と動かせない物、音の出る物と出ない物、大きな音を出す物と小さな音を出す物、等々。それぞれが微妙に異なった体験を作り出す。色、形状、素材、手触り、持った時の感じ、動かした時の感じ等も同様である。教材として使われる物が異なれば、作り出される体験の質も異なる。したがって、学習のコンテキストも異なってくる。どのような主題を学習する時に、どのような体験のコンテキストが有効であるかということは、モノを使った教育にとって重要な問題になる。

知育偏重が指摘されるわが国の教育においては、これまでモノの持つ文化的な意味にばかり関心が払われてきた。それに対してモノの体験生成的な側面は軽視されてきたと

というのが実状である。博物館においてさえ、近年までモノが持つ体験的な側面に関する注目は少なかった。しかし、アウトリーチ教材をデザインするにあたっては、モノの持つ体験生成的な力に対する的確な洞察が求められるだろう。

民族学の研究者にとっては、モノは重要な知識をイラストする（具象化する）ための一つ的手段にすぎないかもしれない。しかし、自分が経験したことの無い異文化世界について学ぶ学習者にとっては、モノこそが知の出発点であり、その上に理解を築くべき基盤の体験を与えてくれるものである。モノに触れたときに生まれる感覚や情動の体験から、様々な知識学習が生長発展していくのである。だからこそ、モノが創り出すこの基盤体験の本質をよく理解することが重要なのである。

5.2 モノが持つ体験生成力を最大限にひきだすために

それでは、モノが持っている体験生成力を最大限に引き出して国際理解教育に活用するためには、我々はどうのような点に気をつけたらよいのであろうか。我々は教材作りの経験から、次の4つの原則を導き出した。

1. 体験の感覚相を拡大するように使う

ただ観察する（視覚相の体験）のみでなく、実際にさわってみたり（触覚相の体験）、動かしたり使ったりしてみる（筋肉運動相の体験）。また、場合によっては、音を鳴らしてみたり（聴覚相の体験）味わってみたり（味覚相の体験）することが重要である。

2. 注意を集中させる（新しい気づきや発想を促す）ように使う

ただ漫然と観察するのみでなく、ポイントを定めた観察や、教師による適切なフィードバックの存在が、学習者の集中力を高める。特に工作という活動は、注意力の集中と緻密な観察を助長する。

3. 複数のモノを組み合わせる使う——数によって異なる利用法の工夫

①単独での使用——新しい（異文化の）物を体験し、新しい体験から異文化への気づき、自文化の自明性を見直し（既存の認知の枠組みへのチャレンジ）が期待できる。

②二つ（あるいは少数）の物を比較する——類似点の発見、相違点の発見、両者の関係づけ等が可能である。

③多くの物の（通文化的）比較・分類・関係づけをする

人類は多様であることに気づき、同時に、類似性／共通性に気づくことも期待できる。すなわち、関係づけと様々な一般化（解釈）への試みである。

④ひとつの文化に関する多くの物を関連づけ、総合的に体験してみる——豊かな厚みのある感覚経験を獲得し、具体的なイメージの形成を助ける。

⑤さらに人間（外国／異文化からのゲスト）と併せて相互作用的に利用する――

学習対象文化に関するさらに強く豊かな体験と明瞭なイメージの形成が可能である。

4. 自己像の拡大と見直しを促すように使う――異文化の服装や装身具を身につけ、鏡や写真で「異文化の自分」を見てみる。あるいは、友だち同士でふだんとは違う姿を観察・コメントし合う。特に民族服の利用で効果的である。

もちろん経験の積み重ねによって、これ以外にいくつもの原則を発見することが可能であるはずだ。

5.3 異文化理解教育の教材として適したモノとは

では、異文化理解教育のための実物教材として力を持つモノとはどのような特徴を備えたものであろうか。体験生成力の観点から見ると、民族誌的に重要な意味を持ったものが必ずしも実物教材として有効であるとは限らない。このことは民族学の専門家の立場からすると受け入れがたいことではあるが、アウトリーチ教材開発においては、この点をしっかり認識しておかなければならない。

一般的に言って、アウトリーチ教材として適当な実物資料は、次のようなものである。

- 1) 国家と結びついた「ハイカルチャー」ではなく、ごく普通の「生活文化」の品々。特に学習者である子供たちの日常生活世界の中に容易に位置づけられるようなものが適する。例えば、衣服、食器・調理用具、楽器、遊具、学校用品、などである。
- 2) 強い印象を与えるもの――学習者にとって新奇性のあるもので、「驚き」・「不思議」の感情や好奇心を喚起するようなもの。
- 3) 子供たちが直接手に持ってハンズオン体験ができるようなもの。壊れにくく、維持管理が容易なものがよい。
- 4) できるだけ多くの感覚相に訴え、複合的な「体験」を作り出せるもの。視覚、聴覚、触覚（手触り、重さ、硬さ、等）、嗅覚、味覚、運動感覚等、訴える感覚相は多ければ多いほどよい。
- 5) 比較や関係づけが可能なものであること。また可能になるように集めることが重要である。

もう一度くり返すが、教材キットを設計するにあたっては、民族誌的なコンテンツとともに体験生成につながる物理的属性も十分考慮に入れる必要があるということである。

5.4 異文化コンピテンシーの育成を目標として

異文化理解教育の目標を、自文化とは異なる特定の文化のコンテンツに関する知識を増やすことと考えるならば（例えば、祖父江1997）、体験生成を重視したキット作りは単に新奇性と面白さだけを追求した教育の主旨に沿わないものと批判されるかもしれない。しかし、異文化理解教育の目標が「異文化コンピテンシー」と呼べるような心理的能力・資質の育成にあると考えるならば、それは教育の主旨に十分に合致したものであるとすることができる。

異文化コンピテンシーとは、主に国際経営学と経営心理学の分野で1980年代から注目されてきた能力であり、当時急速に国際化が進展しつつあったビジネス世界で、国境を越えて職務を遂行できるような能力を持った人材を教育するという現実的な要請の下に、研究が進められてきた。1990年代以降は、社会心理学者や教育学者の間にも類似した問題意識が高まり研究が進められている（山岸1997、山岸ほか1995、二宮ほか2003）。

コンピテンシー（またはコンピテンス）とは、特定個人に付与された才能とも区別され、またきわめて道具的で限定的な技能とも異なる、適切な教育訓練によりだれでも身につけることができる一般性をもった心理的能力（しばしば資質と呼ばれる）のことを指す。したがって異文化コンピテンシーも、当然ながら特定の文化に限定されるものではなく、どのような文化であれ、自文化とは異なる文化に対処する際に応用可能であるはずだ。

そのように考えるならば、異文化理解教育のための教材キットは、特定の文化を対象としたミニ民族誌的キットである必要はなく、むしろ通文化的キットの方が効果的であることも多いであろう。通文化型キットは、学習者に複数の文化から選ばれたアイテム間の類似性と差異性に注目して、比較・分類・命名・関係づけという認知的操作を要求するところにその特徴があり、自文化中心的な固定的な世界観を打ちくずし、相対的多文化的な認識を育成するために大きな力を持つと考える。

6 提案：国立民族学博物館が目指すべきアウトリーチ・プログラム

本稿でこれまで論じてきたのは桜美林大学が実践してきた国際理解教育のためのアウトリーチ活動の経験ではあるが、そこから得られた技術や洞察には、博物館が行う活動にも一般化できることが多くあると思われる。そこで最後に、「みんぱっく」という愛称の下にすでにすぐれた活動を展開している民博のアウトリーチ活動のレベルをさらに一段階高めるための提案を示す。

民博が国の威信をかけた博物館として、学術的にも、設備的にも、またコレクションの質と量においても、わが国でトップの博物館であることは異論のない所である。しか

しその卓越した学術研究活動に比して、教育普及活動にはこれまで十分の力が注がれてきたとは言いがたいであろう。また国立の機関という制約も、利用者との関係を硬直的で疎遠なものにしてしまいがちであった。民博には、その圧倒的なリソースを利用者に提供する義務があり、その一つの方法としてアウトリーチ活動の持つ意義は大きいはずである。

みんぱくは、民族学博物館として提供できる世界の実物資料と豊富で正確な民族誌的情報を、容易に輸送可能なパッケージにして全国各地の学校に貸し出すというサービスであり、まさにモノを通して知識の伝達と普及を行うという博物館本来の教育活動を拡大するものである。しかしこれまでのやり方では、明らかな限界も見える。

問題は、キットに対する考え方と組織論にある。例えば、みんぱくの韓国キットは、典型的なレディメイド・キットであり、文化的コンテンツを教えることを意図して作られたミニ民族誌型のキットである。周到に選ばれた実物資料と内容豊かな解説の組み合わせがその特徴であり、それはまさにプロが作った出前の博物館展示とでも呼ぶのがふさわしいような技術的完成度の非常に高いパワーあふれるキットである。その製作には多くの専門家が参加し、多大な労力と時間が費やされた。

しかし、草の根プロジェクトの場合でもそうであったように、ミニ民族誌型のキットをデザインからはじめて実用品にまで完成させるのは容易な仕事ではない。この製作に要する多大なコストこそがみんぱくのようなミニ民族誌型キットの最大の問題である。そのため、多種類のキットを比較的短期間に開発することはきわめて困難である。少数種のキットを何組も作って同時にたくさんの利用者に貸し出すことを目指すならともかく、下手をすると、膨大なリソースを有しながら、実際にはほんのわずかしかなアウトリーチ・サービスとして利用者に提供できない、という結果になってしまうだろう。

さらに加えて、多大な労力を投入して作ったちみつな既製の固定キットが現場教師にとって最も使いやすい教材とは限らないという問題もある。我々の経験では、教師は利用法まで制約されるような計画されすぎた既製のキットをそのまま使うよりも、各自の授業計画に応じて多少の工夫を加えた自分用のキットを使うことを好む。後者の方が教師のかかわりがより能動的になり、結果的に生き生きとした授業が作れるのである。そのためには、利用者である教師自身にキット作りに参与してもらう必要がある。

みんぱくは、利用者の所在地が民博に近いか遠いかに関わらず、インターネットと郵便という遠隔コミュニケーション・メディアと宅配便を用いた全国一律のサービスを提供するシステムをとっている。私は、そこにサービスの向上を目指す上で大きな限界を感じる。桜美林の草の根プロジェクトは、地域社会にその主要なサービス対象範囲を限定したために、利用者との関係は直接対面を原則としている。我々はその間に教師の創造性を引き出す大きな可能性を見出したと思う。草の根の資料室で、多くの資料に直接手を触れながら考え、その場にいる支援者と話し合い民族誌的情報を確認する。仮に20

～30分という短い時間であっても、その時間は、教師にとって創造的な時間であり、価値ある学習の時間である。アウトリーチ・プログラムにとって、可能な限り活用すべき至宝の機会だというべきであろう。民博には、そのような機会をとらえて最大限に活用するだけの条件が十分に備わっている。

民博のアウトリーチ・プログラムは、その対象地域を近隣地域と遠隔地域に二分しなければならない。その境界は、直接民博まで来られるか否かという基準で決められる。それを決めるのは、物理的な距離と交通アクセスのみでなく、利用者自身の熱意も重要な要素となるだろう。そして近隣地域の利用者と遠隔地域の利用者には、異なる形態のサービスを提供するのである。

近隣地域の利用者には、博物館のアウトリーチ・プログラム資料室で実物を見ながら授業を構想し、利用すべきアイテムを選んでもらう。別の言葉で言えば自分のためのキットを作ってもらうのである。その際、博物館の常設展示やビデオテークは、レファレンスのための有効なデータベースとして活用されるだろう。利用者が選んだ資料は、指定日にこん包して学校に宅配するか、利用者自身に車で取りに来てもらう。

そのようなサービスを行うためには、民博内に主に学校教師を対象とした「教育支援センター」を開設し、そこに貸し出し用の実物資料をディスプレイしておく必要がある。利用者が実物資料を自由に手にとってその重さや感触を確かめながら選ぶことが出来るようにすることが大切である。その場にプログラムの専門スタッフがいて、利用者からの様々な質問に答えたり、各アイテムの利用法に関する助言や提案をすることは、学校現場に対する博物館の影響力を価値あるものに高めるために不可欠のことである。民博の場合、そのような専門スタッフとして大学院生のインターンを活用することができるだろう。文化人類学分野の専門教育機関でもある民博が、研究面の訓練だけでなく教育面での訓練の機会も提供することは、大学院生のキャリア開発という点でも有意義なことであるはずだ。

一方、ロジスティック面で制約の大きい遠隔地域の利用者に対しては、これまで通りのみんぱく方式のサービスを継続することが必要であろう。しかし、ウェブページ上に貸し出し用資料の写真入り目録を掲載することができれば、利用者はそれをバーチャル資料室として自らの授業に必要な資料を自分自身の判断で選ぶことが可能になるかもしれない。その際Eメールによる情報提供やアドバイスができれば、さらに効果的であろう。

民博に教師のための教育支援センターが出来れば、それは教師を民博に引きつける大きな力になるだろう。民博は、ただ見るだけの博物館から、自分で使える博物館になるのである。それはある意味で、まさに究極の参加型博物館といえるかもしれない。

博物館来館者の中でも教師は特別の存在である。それは彼らが、博物館が伝えようとしている重要な教育的メッセージを、教室まで運んで子供たちに伝えてくれるからであ

る。教師は、アウトリーチ・プログラムの重要な参画者であり、博物館にとっての出張学芸員・解説員となれる。民博が目指すアウトリーチ・プログラムは、そのような教師参画型の活動とすべきである。

本稿が提案するアウトリーチ・プログラムを実行することにより、民博は多くのものを獲得する。まず、全国の学校で行われている国際理解の授業を支援することを通じて、日本全体の国際理解のレベルおよび異文化コンピテンシーを高めるという重要な役割を果たすことができる。また、全国の教師および教育関係者との間に良好なパブリックリレーションズを築くことも可能になり、さらには、来館者数の増加にもつながっていくだろう。また、民博の大学院教育にとっての利益も忘れるわけにはいかない。アウトリーチ活動に参加し、現場の教員との密なふれあいを通じて、若い人類学者の卵たちのために、研究者としての資質のみでなく、教育者としての資質も磨くことができる。それは、教育機関としての民博にとって価値あることであろう。

参考文献

J・フォーク, L・ディアーキング

1996 『博物館体験：学芸員のための視点』（高橋順一訳）雄山閣

二宮皓ほか

2003 「Cross-Cultural Competence を育成するカリキュラムモデルの研究」第13回日本国際理解教育学会研究大会

祖父江孝男

1997 「文化人類学の視点から」『異文化間教育学』11：24-36

山岸みどり

1997 「異文化間リテラシーと異文化間能力」『異文化間教育学』11：37-51

山岸みどり, 井下理, 渡辺文夫

1995 「異文化間能力測定を試み」渡辺(編)『国際化と異文化教育』現代のエスプリ299 至文堂
渡辺文夫

1995 「心理学的異文化研究の基礎」渡辺(編)『異文化接触の心理学』川島書店